

教育関連記事

エデュサン  
edu sun

2

2025 / No.114



イングルウッドクリフス市の評議会室で表彰を受けるニューヨーク育英学園の  
ダブルダッチチーム (Photo: ニューヨーク育英学園)

## 1. 教育レポート

◆[大韓民国総領事とイングルウッドクリフス市長 NY 育英学園を訪問](#)

◆[森の幼稚園で冬を満喫 NY 育英学園 NJ キャンパス全日制幼児部](#)

◆[ホップ、ステップ、ジャンプ！縄跳び大会を開催 NY 育英学園サタデースクール・マンハッタン校](#)

◆[スケート教室を5週間連続で開催 NY 育英学園 NJ キャンパス全日制小学部](#)

◆[日本語と英語で親しむコーラス鑑賞 NY 育英学園 NJ 全日制小学部](#)

## 2. NY 教育関連ニュース

◆[障がい児数百人、プリスクールに行けず 官僚主義、交通手段の確保など問題山積](#)

◆[従属、抵抗、静観、反応さまざま 多様性推進禁止の大統領令](#)

◆[NY の政治家が手がける児童書 絵本や写真集、伝記から陰謀論物語まで…ホワイトハウスで](#)

[飼われていた猫の話も](#)

◆[新しい数学カリキュラム、教師から批判の声 「2～3年で慣れる」と開発者](#)



エデュサン  
edu sun

# 1. 教育レポート

EDUCATION REPORT

# 大韓民国総領事とイングルウッドクリフス市長

## NY 育英学園を訪問

2/14/2025

在ニューヨーク大韓民国総領事館の金義桓（キム・ウィファン）総領事とニュージャージー州イングルウッドクリフス市のマーク・パク（朴明根）市長が2月5日、ニューヨーク育英学園を訪問し、子どもたちと交流を深めた。

当日は、子どもたちが金総領事と朴市長を出迎え、児童会副会長の小堀麻純さん（小5）が訪問に対するお礼を英語で堂々と述べた。金総領事は、「未来はあなたたちの手の中にあります。今日の皆さんは、明日の希望であり、平和と友情の架け橋になります。韓国と日本は、過去2000年の間、友人であり隣人でした。今後も両国の友情を育ててください。夢を信じて進んでください」と流ちょうな日本語で語りかけた。またパク市長は、昨年12月に行われたダブルダッチの国際大会で、ニューヨーク育英学園が3位に入賞したことにふれ、「あなたたちはイングルウッドクリフス市の誇りです。私は移民一世で、英語もネイティブでないにもかかわらず市長になりました。小さい頃からアメリカで育っている皆さんには大きなチャンスがあるので、ぜひ頑張ってください」と励ました。

歓迎式の後は岡本徹学園長の案内の下、授業を参観。金総領事は子どもたちに「英語と日本語、どちらが難しいですか？ 私には両方難しいです」「どのようなアートが好きですか？」などと質問した。成田彩花さん（小4）は、「日本語は漢字、ひらがな、カタカナなど、覚えなければならないことが多いので、日本語のほうがむずかしいと思います」と答えました。スピーチをした小堀麻純さんは、「スピーチをした時はすごくきんちょうしたけど、無事に言えました。その後に、キムさんが日本語でスピーチをしてくれてすごいなあ、と思いました」（ともに原文ママ）と感想を寄せた。

今回の訪問を受けて岡本学園長は、「グローバルタレントの育成を目指すとともに、地域に根差した学園運営を目指す当学園としては、総領事と市長に訪問いただけたことを大変うれしく思う。12日には、市長によるダブルダッチ大会の表彰もあった。今後もさまざまな機会を通じて“ニューヨークならではの日本教育”に力を注いでいきたい」と述べた。また、小学部門担当の米原佑樹先生は、「子どもたちが予想していた以上に堂々としていて、とても頼もしかった」と目を細めていた。

（文：本紙、写真提供：ニューヨーク育英学園）



子どもたちに励ましの言葉を贈る、  
金義桓・在ニューヨーク大韓民国総領事



岡本学園長（右）の案内の下、子どもたちと交流する  
金総領事（右から2人目）

# 森の幼稚園で冬を満喫

NY 育英学園 NJ キャンパス全日制幼児部

2/27/2025

ニューヨーク育英学園全日制部門幼児部(ニュージャージー州イングルウッドクリフス、岡本 徹学園長)は2月4日、テナフライ自然公園で「森の幼稚園」を実施した。

少し気温も上がったこの日は、今年度3回目で最後の森の幼稚園となり、年長組の園児にとっては3年間の思い出が詰まった大好きな森とお別れの日でもあった。見慣れた小川や湖は一面氷の世界で、子どもたちは大自然を感じさせる白い冬の世界を堪能した。

赤のトレッキングコースには、木や小物で作った「妖精の家」が点在。子どもたちはそれらを発見してはうれしそうに保育者に報告し、友達とのおしゃべりに花を咲かせていた。園児たちは年間にわたって大自然の中を散策する「森の幼稚園」を通じて、自然の雄大さと尊さを学んだようだ。(情報・写真提供:ニューヨーク育英学園ニュージャージーキャンパス全日制幼児部)

森の中で「妖精の家」を見つけたよ



氷の川ってガラスみたいだね

# ホップ、ステップ、ジャンプ！縄跳び大会を開催

NY 育英学園サタデースクール・マンハッタン校

2/27/2025

育英サタデースクールマンハッタン校（牧野佳代子ディレクター）は2月8日、全校縄跳び大会を開催した。小学部1年生から6年生が地下の体育館に集まり、保護者や卒業生ボランティアも参加した。

最初の演目では、小中高の2学年ごとに分かれて各1分間ずつ技を披露した。先陣を切ったのは低学年（1、2年生）で、前跳び、駆け足跳びを披露した。中学年（3、4年生）はグーチョキパー跳びと後ろ跳びを、高学年（5、6年生）はあや跳び、二重跳び、交差跳びをそれぞれ披露した。保護者の声援が飛び交う中、少し緊張した様子の子、得意げに跳んでいる子もいた。

続いて行われた前跳び持久跳び競争では1年生から6年生の全員が体育館いっぱいに広がって同時にスタート。失敗した子から座っていき、最後まで残った子が学年での優勝者となる競争では、「頑張れ！」「集中して！」といったかけ声と子どもたちの気合が体育館中に満ち、熱気は最高潮に。残り3～4人になると、座っている子どもたちからも「がんばれ、がんばれ！」と大きな声援が飛んでいた。最後まで失敗をせずに跳び続けられ、各学年の優勝者となった子どもは、全校生徒からの大きな拍手と歓声に包まれ、それぞれ誇らし気だった。

最後は大縄跳び発表会。大きな縄をボランティアの高校生2人で回す中、1年生から6年生までが蛇のように長い列を作って20分間の8の字跳びに挑戦した。体育教師の跳んだ数を数える声と、大縄に入るタイミングを教える担任の「よいしょ！今だ！」のかけ声を受けて、一人一人が順番に大縄を跳んだ。普通に跳ぶ子、くぐり抜ける子もいれば、くると回転して技を見せながら跳んで見せる子もいて、会場は大いに盛り上がった。

今後も体育の授業で縄跳びの指導は引き続き行われるが、今回の大会を機に子どもたちの縄跳びの技術もさらに向上していこう。（情報・写真提供：ニューヨーク育英学園サタデースクール・マンハッタン校）



中学年の縄跳び。真剣に跳んでます



全校で大縄にチャレンジ。  
保護者の声援もヒートアップ

# スケート教室を 5 週間連続で開催

NY 育英学園 NJ キャンパス全日制小学部

2/27/2025

ニューヨーク育英学園ニュージャージー全日制部門（ニュージャージー州イングルウッドクリフス、岡本 徹学園長）は小学部 1 ～ 6 年生を対象に 1 月 9 日からの毎週木曜、5 週間にわたりスケート教室を開催した。会場は同州のハッケンサック・アイス・ハウス。

練習では、初心者、初級、中級、上級の習熟度別に分かれ、各自のレベルに応じて指導。転んだときの対処法から、少し難易度の高いスケート技術、さらにはスピンの練習まで、子どもたちはみな熱心に取り組み、回を重ねるごとに技術を向上させていった。

2 週目には「親子スケート教室」を実施。最終週の「発表会」では、練習の成果をしっかりと発揮し、一生懸命に滑る姿が印象的だった。参加者と保護者が一緒に滑るプログラム「みんなですべろう」では、自由に滑ったり、友達同士で手をつないだりしながら、スケートの楽しさを改めて実感するひとときとなった。会場には多くの保護者が詰めかけ、子どもたちの頑張る姿に温かい拍手を贈った。

スケート教室に参加した子どもたちからは「練習を重ねるうちに上達していくのが実感できて楽しかった」「発表会で一生懸命練習した成果を発揮できてうれしかった」などといった感想が聞かれた。（情報・写真提供：ニューヨーク育英学園ニュージャージーキャンパス全日制小学部）

転ばないように集中。支える先生も真剣です



元気いっぱい！氷上を楽しむ子どもたち

# 日本語と英語で親しむコーラス鑑賞

NY 育英学園 NJ 全日制小学部

2/27/2025

ニューヨーク育英学園全日制部門小学部（ニュージャージー州イングルウッドクリフス、岡本 徹学園長）は2月7日、同州フォートリーを拠点に活動する日本人女性のコーラスグループ、ハーモニーバスケットのメンバーによるコンサートを開催した。

「一日英語の日（All English Day）」のこの日、子どもたちは英語で司会をし、行事企画委員会の子ども4人が英語で曲の紹介をした。ハーモニーバスケットが披露したのは、ディズニー映画リトルマーメイドの挿入歌「Part of the World」から沖縄の童謡、全国高校野球のテーマソング、1940年代のクラシック曲まで全8曲。子どもたちは、リズムに合わせて体を動かしたりして女性混声合唱の素晴らしさを堪能した。最後は、おなじみの「雪やこんこ」のアレンジ曲で盛り上がり、子どもたちは、英語の授業で手話を付けながら練習した「Thank You Mommy」を返礼として合唱した。日本語と英語がそれぞれにもつ美しい歌詞と響き、メロディーを満喫する一日となった。（情報・写真提供：ニューヨーク育英学園ニュージャージー全日制小学部）



子どもから大人までが楽しめる歌を披露してくれた、ハーモニーバスケットのメンバー



エデュサン  
edu sun

## 2. NY 教育関連ニュース

NEW YORK EDUCATION NEWS



写真はイメージ (photo: Erika Fletcher / Unsplash)

# 障がい児数百人、プリスクールに行けず 官僚主義、交通手段の確保など問題山積

2/11/2025

ニューヨーク市のアダムズ市長が障がいのある全ての子どもに教育の機会を約束したのが2年前。しかし、障がい児数百人がプリスクールに行くことができないにいたる実態が最近の市議会公聴会で明るみに出た。チョークビートが1月29日、伝えた。

ミルデラさんがペルーから引っ越してきたのは2年前。4歳の自閉症の息子、マテオ君が学校に通えると思ったからだ。昨年9月にセラピーを含む特殊学級入りの約束を取り付けたものの、登校に関する具体的な通知がない。公聴会に出席したミルデラさんは、マンハッタンのシェルターで「毎日、無為に過ごすだけ」とスペイン語で話している。

同じような状況の子どもたちは市内に450人余。アダムズ氏は教員給与を引き上げ、プリスクール新設に5500万ドルの予算を確保したにもかかわらずだ。貧困層の子どもへの教育支援・非営利団体 Advocates for Children の政策ディレクター、ランディ・レビバインさんは「選択の余地はない。市は最優先事項にすべきだ」と主張する。

元凶は官僚主義。保護者は提出する書類の多さに辟易。学校を新設しようとする団体も、許可を得る必要のある官庁の多さに呆れている。その一つ、Kennedy Children's Center の CEO、ジャーニー・アルターさんは公聴会で「昨年8月からオープン可能だったのに、消防局や建築局の許可がいまだに下りない。誰も気にしていない」と批判した。交通手段の確保も問題だ。マテオ君はスクールバスに乗るにもサポートが必要。市教育局 (DOE) からスクールバスの代わりにライドシェアを使うことになると言われて途方に暮れた。「夫が働きに出ている間、11カ月の赤ちゃんを連れて学校まで一緒に行かなければならないと思うと、くじけそうになる」と肩を落とす。



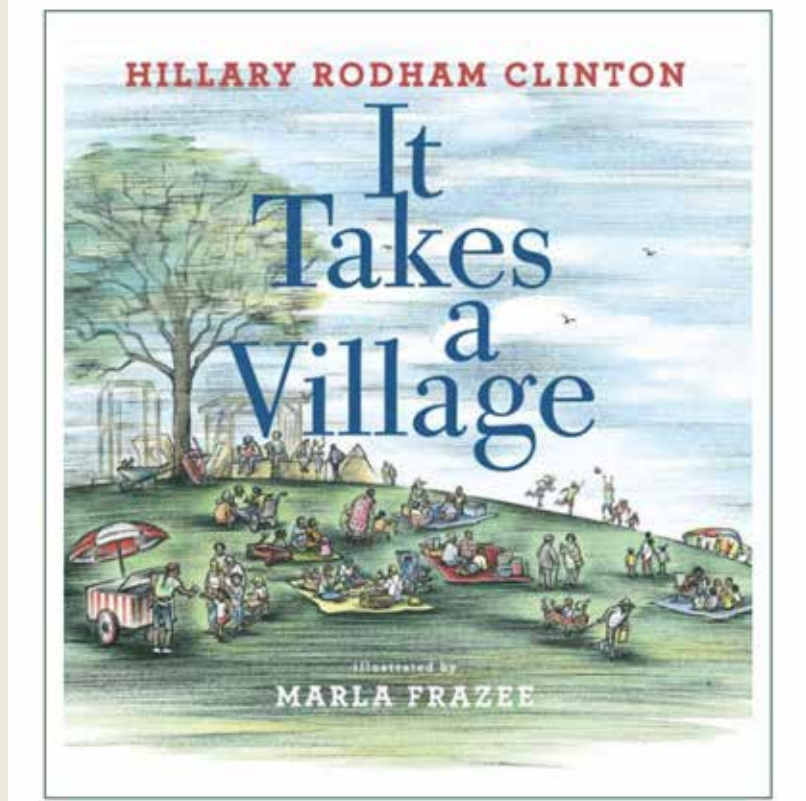
## 従属、抵抗、静観、反応さまざま 多様性推進禁止の大統領令

2/18/2025

教育機関における多様性推進の取り組みを禁止するトランプ大統領令を受け、慣行を変更する大学がある一方で、抵抗する団体や成り行きを見守る学校もある。ニューヨーク・タイムズが 13 日、伝えた。

大統領令は、学校に対し、多様性、公平性、包括性（D.E.I.）推進室、D.E.I 関連の役職や行動計画、助成金、契約の打ち切りを求め、「ジェンダー・イデオロギーおよび差別的平等主義」を禁止し、愛国心教育を推進しない学校への連邦政府からの資金援助を差し止めるとしている。これを受け、ノースカロライナ州の公立大学は D.E.I. のクラスを卒業必修科目から除外、アクロン大学は 20 年以上毎年開催してきた「人種の見直し」のフォーラムを中止、コロラド大学は D.E.I. のメインウェブページを削除するなど動きが広がっている。

一方、全米大学教授協会は、D.E.I に関する 2 つの大統領令の阻止を求め、連邦裁判所に提訴した。プリンストン大学では、学長が、大統領令の合憲性がより明確になるまで、「冷静さを保ち、前進を続けよう」とコミュニティに呼びかけた。公立の小・中・高校は、大学ほど連邦資金に頼っておらず、財源の 90% は州および地方税からのものである上、全米の 1 万 3000 の学区には独自のカリキュラムや教育方針を定める広範な自治権が常に認められてきたため、現時点では急いで慣行を変更する学校は少ない。



クリントン元国務長官による絵本「It Takes a Village」(photo: <https://www.simonandschuster.com/>)

## NY の政治家が手がける児童書

絵本や写真集、伝記から陰謀論物語まで…  
ホワイトハウスで飼われていた猫の話も

2/25/2025

ニューヨークの政治家たちによる児童書を、13日付のシティ&ステートNYが紹介している。

「If Pets Could Vote… (2023年)」ニューヨーク市のエリック・ユルリッチ元建築局長が娘のために執筆。猫の議員、カメの裁判官、インコの大統領が登場。「もしペットだけに投票権が与えられたら、それは本当に素晴らしいことでしょう (同書から引用)」 「Dear Socks, Dear Buddy: Kids' Letters to the First Pets (1998年)」ヒラリー・クリントン元国務長官著。子どもたちがホワイトハウスで飼われていた猫のソックスと犬のパディに宛てた手紙とペットの写真を収録。同元国務長官は子どもたちがより良い世界を創るために貢献できることについて対話を始めることを目的に「It Takes a Village (2017)」も執筆。「子どもには説明書が付いていない。しかし、大人にも説明書は付いていない (同)」 「Bold & Brave (2018)」カースティン・ジブルブランド上院議員著。女性の選挙権を主張した10人の女性の短い伝記集。「あなたたちは現代の参政権運動家です (同)」

「The Plot Against the King (2022)」カシュ・パテル FBI 長官著。悪役ヒラリー・クイーンとその使者たちが選挙不正を働き、“高潔な”ドナルド王から王国を再び偉大にするチャンスをだまし取る物語。ハキーム・ジェフリーズ下院少数党院内総務は、アメリカの価値観に関するスピーチを子ども向けの絵本にした「The ABCs of Democracy (2024)」を出版。「独裁よりもアメリカ的価値観」から始まり、「ゼロサム対立よりも熱心な代表」で終わる。他にニューヨーク州元知事のマリオ・クオモ著「The Blue Spruce (1999)」、ニューヨーク市元市長のエド・コッチ著「Eddie: Harold's Little Brother (2004)」や「Eddie Shapes Up (2011)」などもある。



写真はイメージ (photo: Kenny Eliason / Unsplash)

# 新しい数学カリキュラム、教師から批判の声 「2～3年で慣れる」と開発者

2/26/2025

ニューヨーク市の学校で新たに導入される数学のカリキュラム「イラストレイティブ・マス (IM)」が批判を浴びている。今秋から9年生の代数学1で導入を義務付け、今後数年間で高校の全学年で展開する計画だ。ゴッサミストが24日、伝えた。

IMでは、教師が最初から生徒に教え問題を提示するのではなく、生徒が数学の問題を解く際に「発見」の感覚を育むことに重点を置いている。IMの開発者、ビル・マッカラム CEO は、このアプローチの方がより生徒の関心を引きつけ、学習がより長続きするとの研究結果があると主張。ただ、カリキュラムを導入する学校が増えるにつれ、教師たちからの批判も寄せられている。

市公立学校教師組合のマイケル・マルグリー委員長は、昨年10月のインタビューで「教師たちは手に負えない状況だと感じている」と懸念を表明。これを受け、マッカラム氏は「最初の年は教材に慣れるのに苦労する教師が多いが2～3年で慣れる」と説明する。しかし、全ての教育者が批判的なわけではない。7年生の授業で同カリキュラムを2年間にわたり採用しているブルックリンの中学教師、ミア・プライスさんによると、昨年の州のテストで数学の成績が28ポイント上昇、とりわけ障害のある生徒たちの学習への取り組みが向上したという。

supported by



edu sun